

Mo6 10:1



Studio ***46

目次

ウツの川にモブという彼がいた	1
†必須①・自我	2
†必須②・名前	4
†必須③・能力	7
†必須④・仲間	10
†必須⑤・試練	13
始・モブ記	16
-INFOMATION-	19

ウツの川にモブという彼がいた

生まれる前には胎内流産。子供の頃には過去話での早逝。地球にあっては怪獣に踏まれ、異世界にあっては隕石の塵に、挙句に人外の化け物となつては人間に疎まれ、彼はそうして、主演達を佳境に導くための命を授けられた。

彼はいわゆる「モブ」という。「モブ」とは本来、暴徒と化した大衆の意味だ。外来語として愛用する日本では、転じて名もなきその他大勢も指す。

「えっと、次は、何だったっけ……人間と仲良くするために、戦争を終わらせようとする話の、和平交渉シーンだっけ……」

彼には特別、姿などない。字面で「しかし交渉は妨害され、多くの化け物が洪水の犠牲となった」と書かれれば充分だ。

「あの洪水、天罰だったの？ ってそりゃないよ、そういうチート能力やめてほしいよね、物語が一気に傾くからさ……」

それでも彼にも、どうやら自身を定義できる形があった。長い生き死にの繰り返しの中、よくよく思うと、彼が動かすモブ諸侯は「翼を持った化け物」ばかりなのだ。

「え、次は女性型の妖精役なの？ 何で？ オレは絶対表に出ないから大丈夫って、ほんとに……？」

とりあえず彼が、「彼」であるのも定番だった。しかしある時、ついに彼にも重要人物が当てられた日、事件は始まる。

「ちょっと待って、オレ、いつまでこのヒト役なの？ このヒト、死んでるのに死なないんだけど!？」

やがて彼は自らを知った。彼が「彼」であることすらも、本当は物語の都合に過ぎなかった宿命を。

† 必須①・自我

せっかく、ようやく編めるようになった藁わらの籠かごを売って、子供ながらにお金を貯めて、病気の母に良い薬を買うことが初めてできたのに。痛い、と、最後に彼は泣いた。

彼と同じように、病気の母を労わる主役がいた村で。彼は母を連れて炎から逃げ回り、村を囲む魔物まぼに阻まれて死んだ。その火災の本来は、同じく火の力を持つ主役が旅立つために、主役の父が焼き殺された一大イベントだった。

「いやさあ……そもそもオレ、何であの村にいたんだっけ？ ていうか村、焼かれる必要なくない？ 何で村と村人ごと、みんな焼き殺されなきゃいけないかったの？ 主役のお父さん一人が死ぬだけでよくない？」

いつも彼は、死んですぐ辿り着く真っ白な川のほとりで、彼がこれまで行ったモブ人生を思い出してしまう。今回も、それに応える相手が岸辺に現れ、長い愚痴になってしまった。

小さな白い舟の渡し守として、長い髪すみれ色の髪を括る美形の青年が、彼の前で舟にあぐらをかきながら苦笑った。

「ほんとそれなー。お前があそこに憑いたのは、例の妖精の差し金だけど、あいつ完全に、あの村が大惨事になることは予想してたよ。じゃあ止めてやれ、って思うんだけどなー」

「うわ……じゃ、やっぱりオレ、あのヒトと縁切れてないの」

「ああ、またすぐ、今度は当分、地上を旅する天使の守りに憑けられるよ。妖精のお気に入りだからな、その天使ちゃん」

「モブ」である彼は、えんえんとモブを繰り返しながら、何故かこの千年、同じ妖精の下で生き死にを采配されてきた。妖精は決して、わざとではないと目の渡し守に言っているらしいが、彼が死ぬ度に迎えに来るこの渡し守に、彼は散々裏話を教えられている。

「どーせまた、すぐに何かで死んじゃう子供キャラでしょ」

「当たり前。天使は正確には死なないから、天使の消え方はちょっと特殊っぽいけどな？」

その後お前は地球に戻されて久しぶりに人間に生まれて、でも月の虹に消えたり、もっと先には相方に心臓奪われたりするんだってよ」

「はあああ……何か、また、痛そうな……もうやだよ、何でオレそんな、早死にしなきゃいけないキャラばっかりなの？」

「そりゃ、モブだからだろ。重要キャラに捕まったとはいえ、お前の背負う宿命は『モブ』だ。この先どんなキャラの枠に生まれたところで、起こる展開は大差ないはずだぜ」
俺が渡し守、辞められないみたいにな、と青年が苦笑う。いつも渡し守は彼を連れて、新しい人生に導いていく。その仕事は絶対なのだと、物憂さそうな横顔をよく見ていた。

ところが今回、渡し守はふと、眩しいほどのイケメン顔を浮かべて言った。
「ああでも、そう言えば面白いこと妖精にきいたぜ！ 最近、こうやってお前に自我が生えてきたからさ。ひょっとしたらお前は、お前っていうキャラになれるかもって」

「——え？」

「お前、自分では姿見えてないだろうけど、相当美形キャラなんだぜ？ ただのモブにするには惜しい、って皆言ってる」

「そういう問題？ ていうか、それって要するに……オレがオレの姿で、今度は生まれるってこと？」

彼はいつも、大体子供であることは共通しており、幼い内に命を落とす化け物以外の特徴はほとんどなかった。まず、姿があると教えられたのも、この渡し守が初めてなのだ。

妖精娘として生まれた時は、子供時代の意識が彼だった。その妖精が一度死んだ後、蘇った妖精の乙女が新たな意識を持ち、彼をあちこちに適当に生まれさせる上司になった。

「姿だけじゃ意味ないだろ。お前をお前というキャラにする、それが大事なんだよ。まあ、説明が面倒だから、とりあえず俺と一緒に来い。——モブの運命から逃げるために」

モブ。それは物語を盛り上げるために、理不尽でも暴挙に出たり、もしくは惨禍に巻き込まれるだけの「その他大勢」。

彼らは本来、「痛い」などとは思わない。ただ死ぬためだけに生まれて、心など持たされたら、たまったものではない。

だから彼が「痛い」、そう嘆いた時から全ては始まっていた。あくなき炎から逃げ回る中、彼は「熱い」でも「怖い」でもなく、「痛い」と遺したのだ。

ここから本当に、彼は運命を侵す「暴徒^{モブ}」となる。さて、それにはどうしたら良いかというと——

† 必須②・名前

いつもとは違い、真っ白な川を下らず^{さかのぼ}遡った。そんなこともできるんだ、とぼわっとしている彼には、相変わらず姿がない。白いもやもやのような自己イメージしかないのだが、渡し守の青年には実際どう見えているのだろう。

「はい、うんじゃ、今だけこっちに上陸できるようにする。俺の力が続く時間限定だから、舟に戻されたら待ってるよ」

渡し守が彼の手をひき、乗った方とは逆の岸に上がらせてくれた。いつもは川を下って、乗った方と同じ側に降りる。

「向こう側——彼岸には行けないんじゃないの？」

「普通のキャラならそうだな。でもお前は仮にも、モブ——『さざなみ』の一波を担う宿命者だからな」

さざなみ？ ぼやけた首を傾げた彼に、オールを船に括りつけて置いた渡し守が、体をのぼしながら笑って言った。

「モブってーのは、まあつまり、物語に小さな波風を立てる一過性の要員だろ？ だから本質的にはモブは『暴徒』で、『その他大勢』ってのはやっぱ、後付けの解釈なんだよな」

そのため、モブたる意味を背負う者は、一時的にであればどんな場所でも^{あらわ}顕れ得るのだという。打ち寄せるさざなみが岸に上がり、時に荒れて人里を襲うように。

「そのモブの宿命自体は変えられない。だからどういうモブになるか——お前のモブの運命、表現型を変えるんだよ」

「表現……けい？」

岸に上がり、しばらく歩くと、真っ白な世界に突然都会の堤防が見えた。石の階段を上ると地球風の街並みが広がり、渡し守と手を繋ぐ^{つな}彼は呆気にとられる。

「とにかく俺ん家で、色々準備してみようぜ。うちなら変身セットはショタ魔女っ娘から制服関連まで何でもござれだ」

嫌な予感で彼はひやりとした。川から程無く大きな洋館の前に連れてこられて、渡し守はいつの間にか、長かった髪が大人の男性のようにさっぱり切り揃えられている。

洋館の表札には「^{カシュウ}河舟」とあった。日本語、久しぶりだな、と彼はつい思ってしまう。

「あー、なつかし。家のやつらには俺達のこと見えないから、物音はあんまりたてないように注意してくれな？」

「……見えない？」

「俺達はそよそよと、ささやかな波を立てにかかった小さな風さ。でもヒュウガを驚かせると可哀相だから、お静かに」

家に入ると、まっすぐ渡し守の部屋という場所に行った。そこには言葉通り数々の衣装や飾り道具が揃えてあり、何故変身セットがいるの？ と彼はまたも悪寒を感じる。

「俺は舟とここしか来れないから。ここの物で我慢してくれ」

一番気になったのは、先程から妙に大人びていて、口調もどこか悲しげな渡し守だ。彼に何か、助けをくれようとしているのがわかるだけに、断りもできずにソファに座らされる。

「さて。それじゃお前も、その他大勢から暴徒になるんだ」

向かいで座り、にこにこと言った渡し守に彼は固まった。

「改めて俺は、ここでの名は河舟レキだ。さっきすれ違ったヒュウガは俺の嫁で、俺亡き後も必死に当主をしてくれてる」

「れき……ひゅう、が？」

「俺もお前と同じで、早死にの宿命者なんだよ。娘が必死に変えようとしてくれたけど、まあそんなこんなで今は、命の川の渡し守をしてる。そんでこうやって、さざなみの暴徒に時々なってるわけだ」

?? となる彼に、渡し守——レキはお構いなく続けた。

「お前の源の妖精——^{ナギ}凧は、流れに働きかける俺達と逆で、流れを止めちまう凧の性を持った反則者だ。じゃあ、凧から分かたれて個別で活動させられる、『お前』は何だ？」

「……はい？」

「大事な話だからよく考えろよ。俺みたいに、水も^{したた}滴るイイ男。なだけの名前になると、簡単にその他大勢に降格だし」

なるほど、とようやく彼はレキの意図がわかった。今まで明かさなかった渡し守の名を教え、妖精の名にまで言及するのは、どうやら彼の名を論じたいらしい。

「れき……^{レキ}瀝？ レキには、名前があったんだ」

「お前にもあるだろ。っても、これまで毎回変わってるよな、そうだよな……伊達にその他大勢、何千年もやってないよな」

レキの言う通り、彼には特定の名がない。特に思い入れを持ったこともなく、それこそそんな自我はなかった。今も、痛いのもうやだ、それくらいしかモチベーションがない。

「何で、名前なんているの？」

「お前なあ、名無しが物語で、モブ以外になれると思うのか？ 稀に名無しの主役もいるけど、あれは本気で高度だからな！」

「うう……そう言われても、名前とか考えたことない、オレ」
「だからお前はモブなんだ！　今から死ぬ気で、お前の存在しっかりと表す、お前そのものの名前をまず考えるぞ」

名前とはつまり、設定なんだ！　仰々しくレキは続けた。
「響き重視ならそれでいいし、意味重視なら必ずお前らしい何かにしなきゃ駄目だ。お前、まず特技とかあるのかよ？」
「特技？　……うーん……いつも、襲われる時や死ぬ時、きゃあきゃあって逃げ回ることばかりで……」
「辛いなオイ！　何かもっと、他にいい思い出はないのか？」
「思い出……えっと……大体、何か起こる前には、いい事があったり、知らない人に出会ったり、人と約束したりした」
「それは死亡フラグだろ！　ああもう、とにかくいい名前を考えて、名前に合わせたキャラ作りをしなきゃなんだから。可愛い系かつ美形なお前に合う、子供らしい響きでいいから」

子供らしい響き。確かに彼は、大人になることがないままモブ死してきた。彼の名を呼んだのはいつも周囲の大人だ。
「そこまで言うなら、レキがつけてよ。オレ、特に拘りとかないし、レキには娘さんもいたんでしょ？」
「お前なあ。人任せにしてパンツ助とかになったらどうする」
ヒドい。と確かに唸^{うな}ってしまう。レキはずっと、けらけらと笑う。
娘さんにつけてもいいような名前です！　と頼み込んだ彼に、それからやっとな顔で考えてくれたのだった。

† 必須③・能力

名前を考えてやる条件に、俺好みのキャラ設定にさせろ。頼みの綱のレキにそう言われ、彼は顔くしかなかった。彼を連れて来たのもレキなのだから、言うことをきくしかない。

「とりあえず今わかるお前の特徴は、死亡フラグとか断末魔しかないだろ？ 訪れる死の音、シオンで、当面はいつけ」

「ありがと、わかった。えっと、日本語ではこう書くんだ？」

「バカ、そのままの漢字で書くな、縁起でもない」

「レキがつけたのに……大体、次の次の命は、地球行きてさっき言ってたじゃん？」

「凧」を名乗る妖精といた彼の世界にも、漢字を使う地域は一応あった。けれど凧は後からの名で、妖精の時はもっと違う、「小さな星の光」を表す名前がつけられていた。

「ああ、それなら紫苑しおんでいいかもな。紫苑の英語はアスター、星を意味する花の名前だ。やっぱり可憐なのがいいよな、そうなるとコスチュームもやっぱり魔女っ娘路線で……」

「——ちょっと待って。何で、女装、させる気満々？」

レキがクローゼットから、ゴシックロリータというらしい数々の洋装を取り出した。先程からしていた嫌な予感通りに。

「そりゃお前……その姿で、美少女以外の何になるんだよ？」

「え？」

「いつの世も最強は美少女キャラだ。最近は美少女もエグい死に方するけど、それでも死亡率は低い方だからな？」

今度は設定と共に、物語での位置づけ——能力を考えろ、とレキが勧める。そんなことを言っても、勧められて力がつくなら誰も苦労しないのでは、とシオン(仮)は思う。

「オレ、何もできることの覚えがないんだけど」

直近ではせいぜい、藁で籠を編んだくらいだ。次にまた、生まれるキャラによって、シオンの能力は変わってしまう。

「俺も渡し守以外、女装しかできなかったぜ。お前は那点、美少女になれるんだからいいじゃねーか」

「なってどーすんの。中身はオレなのに、主役とか誰かに、守ってもらおうの？」

「ふ、甘いな、昨今は美少女であるだけでインターネットで何でもできるぜ！ まあそれは地球に行った後の話だけど、どうしても売りがなければ、エロキャラするしかないだろ。それがいやなら死ぬ気で何か特技を思い出せ」

「ひ、ヒドイ……レキ、それはさすがに、大人として最低！」

よりによって美少女——子供にエロをやれとは。このままレキに、設定作りを任せてはいけない。売りの無いキャラはモブか薄い本行きだ！ と奇怪な現実を突き付けてくる。

「えーっと……凧になる前のことは、もう覚えてなくて……凧は確かに見るからに、魔法少女な妖精だったけど……」

シオンは凧と、随分長い時間を共に過ごした。凧が何故か死なないからで、内千年は妖精の卵に戻っていた気がする。

最初は凧の方こそ子供だった。彼のモブ意識が死んだ後に、蘇った妖精の力は、魔竜と恐れられた古の虐殺者^{いにしえ}だった。

「凧は凄かったけど。オレの中に、呪いの魔竜を封じられて、オレは死んで魔竜——凧に妖精の体をとられたんだよね」

「へー。何でそこで、生け贄にお前が選ばれたんだ？」

「確か、光と闇、両方持った妖精だったからかも。凧も光と闇を両方持つ魔竜で、凧の力は『天気雨』になったけど……」

その後、特殊な「天気雨」の凧が、妖狐という精に無理に^は埋められたことは覚えている。しかし彼は、夜空に散らばる「小さな星の光」だったこと以外に記憶がない。

「オレを乗っ取る前の小さな凧に、よく歌ったよ。きらきら光る、お空の星よ、って」

自らの呪い。魔竜であることを思い出す前の、古の少女は愛らしかった。彼にとっては妹のようなものだったのだ。

「あー……オレ、お兄ちゃんには、少しなってみたいかも」

美少女より、と強調して伝える。しかしレキは、痛ましい顔になって、衣装を振り分けながら考え込んでしまった。

「いや、だめだ。性格のいい兄貴キャラは必ず、大概死ぬ。男主役なら主役がかすむし、女主役なら彼氏と張り合う」

「えー。でもそこまで大人にならないでしょ、オレ」

「可愛い系弟キャラでも、序盤しか大体出ないからダメだ。少年主役なんてほぼ、よっぽど人気物語でないと光らない。平凡な男子キャラに世の中は冷たいんだ、わかれ」

だからお前は何度も殺され役なんだ、と改めて言われる。釈然としないが、レキの言っていることはわかる。何の能もない彼が、主役並みに活躍する姿はどうにも思い浮かばない。

「オレはもう忘れたけど、凧なら覚えてると思うんだけど。凧に会う前のオレのこととか、ききに行っちゃだめ？」

「無理。あいつ随分前から、橘診療所に閉じ込められてる」

「え？ そうなの？」

彼はずっと、死んだ時に凧とのつながりを思い出して次の人生を始め、生まれた後はまた忘れることを繰り返している。元々同じ体を使っていたので、面と向かって話したこと自体はなく、何となく互いの心を感じる間柄で長年過ごした。

そう言えば凧が、橘診療所という医院の院長と結ばれた時から、凧の心が遠くなった気がした。大体彼は凧の近くで、凧を手助けするモブに生まれていたはずなのに。

「ああもう、仕方ねーなあ。どう見ても今のお前の個性は、そんな可愛いのに一人称が『オレ』なことくらいしかねーし、お前の能力は『オレっ娘』に決定だ、シオン！」

だから絶対に、お前は「オレ」口調をやめるな！ 力強く言いながらレキは、女物のアイドル服を引っ張り出してきた。

「えー！ 何それ、オレっ娘って、それ、能力……なの？」

「とりあえず俺は見たことないからアリ。可愛い。可愛いは正義で『力』だ、シオン」

「でもでも、どうしてもオレ、女の子の恰好しないと駄目？」

何故かそれは、何となくシオンは嫌だった。しかしレキは、そっちは既に決定事項だ、と言ってきいてくれない。

この後シオンは、レキの真意を知ることになる。衣装部屋にある全身鏡で、青白く長い髪の自身に初めて出会いながら。



† 必須④・仲間

かごめ、かごめ。菓の籠を売る時に口ずさんでいた童謡を、ふてくされながら唱う美少女にレキはとても満足げだった。

レキの家から命の川の舟に戻った後も、長い雪白の髪^{うた}の右ポニーテールと、天使のような白い洋服姿は変わらなかった。

「お前、初めて聴いたけど、歌上手いじゃん。それも能力の一つで充分使えると思うぜ」
「……歌うオレっ娘って、どういうキャラなのさ。そもそも、ここで必死にオレの設定作って、次の命に持ち込めるの？」

根本的な疑問をきくと、実はそれが一番難題だ、とレキの若くなった声で返ってきた。舟に戻るとレキは元の長い髪に戻り、一つに括ってから身軽な姿でオールを取っていた。「俺の姿がこうやって変わるように、普通は入り込む世界に合わせてキャラ像は強制される。でも実は俺、お前が次に、どんなキャラに生まれるかは尻から教えられてるんだよ」

そういえば次は天使だ、とレキは言っていた。だからその天使の姿に寄せて、今から慣れるという。天使に本来性別はないが、シオンが宿る天使は元人間の女の子であるという。

「お前にはもう自我が生えてるから、姿はともかく、ここの記憶は残す方法がある。生まれる天使を陰から操り、モブの運命を回避するんだ。そのために最大の必須事項は仲間だ」

おおお、とシオンは初めてレキを見直していた。何となく流されてここまできたが、全ては計算されたことだったのだ。

「とにかく主役ばい男キャラに出会ったら絡め。今のお前が宿るような天使なら絶対美少女だ、死ぬ気で最速で落とせ」

えええ……とシオンは早速失速した。オレっ娘か何かよく知らないが、一応女性に宿るのも尻以来なのに、レキは何故そこまで美少女に拘るのだろう。

「いや、無理だって、オレそもそも恋愛はしたことないし。十三歳以上生きれた記憶がないのに、オレに何を期待するの」

「お前、さっき自分で言ったんじゃないか。美少女になって主役に守ってもらって」

「あれ、有効だったの！？ 甘いって言ってたじゃん！」

「いやいや、歌う美少女天使とか、結構ぐぐっとくるなって。敵役やれる力はなさそうだし、それなら重要キャラの鉄板は幼馴染みか彼女か妹だ。どれでもいいから主役にくっつけ」

そんなこと言っても、とシオンはひたすら困る。

「まずどうやって主役を見分けるの？　　というか天使って、幼馴染みとか妹になれるの？
神様のお使いじゃないの？」

「その辺はどんな手段でも近い立場になるんだ。可愛い体があれば、主役を寝取ってでもヒロインになる覚悟を決めろ」

「!？」

「流血か色恋か道楽か雑学、どれかはやらないと売れない。売れなければ人気なしで殺されて出番が消える。ヒロインの座さえ勝ち取ってしまえば、死んでもモブ死じゃなくなる」

ヒロインも死ぬことはあるからな、とレキが加える。もう何が何だか、シオンにはさっぱりわからなくなってしまった。

「結局オレ死ぬの、モブ死かそうじゃないかだけなの！？　それなら寝取りとか無理だしもうモブでいいし！」

「諦めるな、モブ死でなければ、ブラックヒロインになって復活も有り得るんだ。凧なんてまさにその口じゃねーか」

「やだよ、黒い女の子とかますますやりたくないし！　凧も人殺しはもう嫌だっけずっと泣いてたんだよ!？」

そこでようやく思い出すことができた。どうして彼が凧と出会い、凧のことだけは忘れない生き死にを続けてきたのか。

「オレがいれば、凧は魔竜に負けない、妖精でいられるって。魔竜はずっと消えないから、オレも何処にもいかないでって、だから凧はずっとオレのこと——……」

白い川を、ゆらゆら漂うだけの舟の上で。

シオンは思わず立ち上がって、湧き上がる遠い記憶を叫んでいた。

「だから凧、ずっと、オレといるって言ってたのに……何で、いつからオレ……一人になっちゃったの……？」

凧を守る。人殺しの魔竜になるだけの運命から、何処かの院長と結ばれるほどの平穏を、彼女は手にしたのだ。そしていつしか彼とは、記憶の上でのつながりしかなくなっていた。

「……何で、凧、会えないの……？　オレ……もう、凧にはいらぬの……？」

堰^{せき}を切ったように、大粒の涙が溢れてしまった。どうせまた、すぐ次の命に向かうのだから、凧の不在を彼はこれまで考えないようにしていたのに。

レキはオールを舟底に横たえながら、あちゃあ、という顔で黙り込んでしまった。

淋しい。涙と共に浮かぶ心に、シオンはいつまでもぐずる。こんなはずじゃなかった。胸の底からそう込み上げてくる。

「何か、ヘン、じゃない……？ オレがオレになれるとか、凧がいつの間に、オレなしで大丈夫になったのか、とか……」

「……」

運命の流れを止める。「凧」にしてしまう反則者の少女は、魔竜という己の運命も、せき止めるだけで変えられなかった。生まれながらに、永遠の「暴徒」はむしろ凧だったはずだ。

「誰か、オレ以外が、凧を助けたんだよね……？ それで、凧、オレのことも助けようとしてる……違う……？」

彼は伊達に、千年を超える長い時間を、凧と共に過ごしていない。本当はそんな優しい少女だから、彼も守りたかった。

「気付いてしまったか……シオン……」

レキが神妙な顔つきをして、シオンと同じく立ち上がった。

「そう、凧は、渡し守の俺達に会って、院長という重要なキャラに関わって、運命の流れを変えた。モブが生き残れるキャラになるには、あと一つだけ、最重要な必須があるんだ」

「……？」

向こう岸に繋がれたままの舟は、儚く揺れるだけで上にも下にも流れていかない。レキの家があった知らない世界が、今も存在しているはずの彼岸。

凧とずっと一緒にいるはずの、彼の此岸はどこにいったのだろう。気が付けば海のように広がった川の向こうには、もう彼がいたはずの元の岸は見えなかった。

十 必須⑤・試練

果たしてシオンが、本当にモブを脱したいかどうか。その意志とは関係なしに、レキはシオンをある鉄橋に送り出した。

「あそこに俺達、さざなみのボス格がいる。いいか？ 心、自我を持ったモブが物語の一員と認められるには、試練——存在意義を手に入れる成長がいるんだ」

シオンは今、一人で錆びた階段を上がり、霧の中に浮かぶ黒い橋の入り口から奥を見つめた。

その先にはシオンよりも小さい、人形のようなひらひらの服を着る子供が、柵の高欄こうらんに座っていた。大きな帽子が顔を隠し、あごで留められた帽子のリボンが風にたなびいている。

レキは、橋にいる子供に、地下水路の門の場所をきけ、とシオンに言い渡した。「水門はもう開けられてる。でも誰も場所を知らない。凧はそこを通過して俺達に出会った。本当なら、凧のいる川と俺達の川は、交わることはないはずなのに」

たとえばの話、レキの川はBという位置で、凧は本来Dにいる。しかし流れをせき止められたDはCという川に分かれ、Bに近隣のCができたことだけでなく、Cの地下深くできた伏流がBの谷底と繋がってしまったのだ。

「お前はDでは、モブにしかなれないが、Cの地下なら凧と同じで主キャラ化できる。凧にもう一度会うのも多分可能だ」

結局そう乗せられて橋まで来てしまった。ただ身一つで。

「えっと……おまえ、レキのボスって、ほんと……？」

「……………」

橋の高欄に無言で座り、足をぶらぶらさせる子供はシオンのいる方を見ている。目の黒っぽい鉄橋に、白い川と灰色の陸しかないここで、濃紫の礼装ドレスは確かな存在感があった。

礼装の子供は、天使風味の白いシオンに少し顔をあげて、光彩のない空ろな金色の眼で口を開いた。

「……『有り得なかった夢』に、いきたいなら、こっち」

え、とシオンは呆気にとられる。レキには試練と言われてここに来たのに、それではあまりに安易過ぎる。

「ここは終着だから……こっち、ついてきて……」

「——」

くるり、と背を向けて歩き出した子供。同時に向かい風がシオンに吹き付けてきた。うわっと目を閉じ視界が途切れる。この強風に抗い、子供の方に向かうことが試練なのだろうか。

「って、そんな簡単なわけないし、そもそも——」

とにかく駆け出したシオンは、全然違うことが唐突に気になってしまった。何だかその子供がとても淋しそうに見えた。

「待って、おまえはずっと、一人でここにいるの——？」

後ろ姿に何とか追いつくと、黒いレースの手袋を掴んだ。やっぱり、と思った瞬間、足を止めた子供が振り返った。

その時ちょうど、一際強い風が吹いて、煽られた帽子が子供から離れ、橋の外に飛んでいったのだった。

「——あ……」

そこにはシオンの、急に気になった事柄への答があった。

高欄に座る人形じみた子供を見て、ふと思ったのだ。まるで、レキが好きそうな服を着てる、と。

「おまえ……やっぱり、レキの、娘なんじゃ……？」

「……………」

帽子が飛んで、中から現れた短い髪は珍しい菫色。レキと顔は似ていないが、この髪色は確実に血縁のものだろう。

「レキも早死にの運命で、娘が変えようとしたって言ってた。おまえはどうしてここにいるの？ 何でさざなみのボス？」

黒い手を掴んだまま尋ねるシオンに、子供は無言のままだ。しかしじわりと、大きな金色の眼に涙が浮かんだ。

「レキ、舟と家しか行けないって言ってたし。多分だけど、この橋にレキは来れないんだね？」

「——……」

「一旦戻ろう。行こ、一人でここにいっても、いいことないよ」

とにかく子供は淋しそうだった。シオンの目的はまず本人がよくわかっておらず、急ぐことでもないのに、この小さな子供をレキの所に連れて行きたいと思ったのだ。

子供が初めて表情を崩し、動揺の声をあげた。

「ぼくは——君を、案内するしか、いけない」

「そうなの？ それじゃ、オレをレキの所に連れてってよ。オレ別に、何処にいきたいとか、何をしたいとかないからさ」

金色のあどけない眼が、ひといきにキョトンと丸くなった。それはまるで、思っても見ない光が差した月の裏だった。

「試練」に構わず、子供と戻ってきたシオン。飛びついた子供をレキが舟で抱き留めながら、ぼろぼろと号泣を始めた。

「おーまーえー……それ、ちょっと天使過ぎるだろ、嘘ー……」

子供も大泣きしながらレキに抱かれている。おそらくレキも子供も、いられる場所や行動に制限があったのだろう。

「サツキ、ごめんなサツキ、ほら泣くなって、大丈夫だから。バカだなシオン……お前、俺達を利用せずに、むしろ助けるバカなんてきいたことないぞ？」

しがみつく子供——皐月を一度舟に降ろすと、レキは先刻降りた陸に向かい、舟を軽く漕ぎ始めながら泣き笑った。

「まあそういう奴だよな、だから凧のことも匿ったわけで、俺の泣き言も全部聞き逃さなかったんだな、お前。そうだよ、サツキは俺の運命を変えるためにここに来て囚われたんだ。俺はもう帰れないけど、サツキだけは帰してやらなきゃで、いつまでも俺も逃げられなかったけど、おかげで助かったよ」

「……いや、全部、ただの偶然なんだけど？」

レキにくっつき、帰るのがいやいや、と首を振る皐月を見て、良かった、とはシオンも思う。思えば彼は、いつもこうして、淋しい子供の手を引いてきた気がしていた。

レキの家に皐月を戻し、その後に彼や、レキがどうなるのかは知らない。あの鉄橋から先に行けないなら、きっと彼のモブ運命は変わらないのだろう。

それでも、良かった。それだけ思い、星の歌を唱っていた。

始・モブ記

気が付けば彼は、「雪」の属性を持つ天使の背中に生えていた。いつも生まれると思いが出すが、彼は直接キャラとして生きることはなく、大概こうして誰かの翼の一部になる。

それまでの記憶は忘れ、羽として体の主の生活を補助するのが今までだった。籠を編む子供の時も、天から落ちてきた化け物の血をひき、光の翼をはやした子供だった。

ただいま、目の前には、ずたずたに細い首を引き裂かれて息も絶え絶えの少年が倒れている。

「——って、ちょっと待って！ 何でコイツ——オレ！？」

雪の天使に生えた彼は、「オレっ娘」設定もすっかり忘れ、元人間の天使として頑張り、見習い天使を卒業したのだ。後は雪の天使が生まれた世界で、魔界の悪魔や魔物が悪いことをしないか見張り、寿命がきた人間を黄泉へ導けばいいだけのはずだった——その青銀の髪、「シオン」と同じ顔貌をした少年に出会わなければ。

「やばい、アイツ死ぬって！ とりあえず騒ぎを大きくして魔物は蹴散らすために、吹雪+こつこつ貯めた^{きらきら}光星大放し！」

日頃は自由に行動させている、雪の天使に強く働きかけた。そもそも少年は見たところ吸血鬼で、魔族の一員だと天使が気付いてしまえば絶対助けてくれない。

その前にとにかく、翼に蓄えた力を放って、疲れて天使の判断力も落とす作戦を無理やり遂行した。こんなに彼が動いたのは初めてだった。

倒れる少年には尖った耳と、血を吐く口には鋭い牙が光る。

「——大丈夫ですか！？ ……え……って、この……ヒト」

天使はすぐに気が付いてしまった。せっかく少年を襲った魔族は追い払えたのに、今度は天使に殺意が芽生える。

「魔族の内輪もめだった——？ 子供の姿をしてるからって、私、騙されないから……！」

ダメだ、判断力の低下が感情面に出た。彼はあわわ、と羽をすくめる。雪の天使は人間の頃に魔物に殺され、魔物嫌いが高じて天使になったようなものだ。魔の少年を浄化せんと、僅かに残った光を右手に集める。

だめ、殺さないで、そう訴える羽の声も、ここまで激昂すると届くわけはなかった。

これ、何死？ 今度はオレ、悪い吸血鬼に生まれてたの？

何故シオン——彼の顔をした少年が目前で倒れていて、彼は少年でなく、雪の天使に宿っているかはわからない。

けれどどの道、「シオン」は殺されてしまうのだろうか。確か、彼をこの世に送り出す時、董色の髪の渡し守は清々しい顔で言っていたというのに。

「いいか？ 今度生まれたら、お前がお前を守り切るんだ。誰がお前かはきっと思い出せる。サツキを助けてくれたお礼に、俺が知る最大の運命変化をお前にもたらしてやるから」

渡し守とその娘は、そもそも運命の流れを^み視る力を持った人間だという。しかし「さぎなみ」は関わる相手のことしか話してはいけず、渡し守や娘自身の悩みは訴えられなかった。それを偶然助けた彼に、渡し守は何かの覚悟を決めたのだ。

「俺の川には、当然二つお隣があってな。一つはお前がいた此岸。そっちはお前が属する世界だから、俺は上がれない。彼岸は逆に俺の世界で、お前は本来行けないんだけど……」

でも、ここで彼らは縁を持った。本当なら^み風の地下水路に彼を案内するはずだったという渡し守は、あと一つ、渡し守だからこそ知る情報を彼に教えてくれた。

「彼岸をどこまでもまっすぐ進め。その先にまた川がある。俺の^{ちから}加護が尽きる前に、必ずそこに辿り着くんだ」

渡し守曰く。たとえばそこには、^み風のDでもなく渡し守のBでもなく、Aという新たな命の川が待っているという。

「俺、そこで笑ってるお前のこと、本当は視たことがあった。何でこんな所までお前が来たのか、ずっと気になってたんだ」

ここじゃお前、モブしか居場所がないだろ、と改めて言う。それは何故なら、彼が本来在る世界ではないからだ、と。

「苦労はまた、色々すると思うけど。お前の片翼はそっちにあって、今のお前は、もがれた翼の羽の寄せ集め。だから、まとまった自己意識も持てないだろうし、優しいだけですぐ死ぬキャラになってるけど……」

でもお前、イイ奴だし。取り戻した娘を自分の家に送った渡し守は、後は任せろ、と笑ってくれた。

「取り残された片翼を守れ。お前もそっちも、早死にし易い運命の下にあることは変わらない」

そして彼は、気が付けば雪の天使の翼の内に生えていた。彼がずっと会いたかった、風の願いという最大の縁で。

だから、ここで、おそらく彼の片翼——同じ顔の少年を、吸血鬼とはいえ死なせるわけにはいかない。彼の適性は天使、片翼はその逆だろうと、渡し守にあらかじめ聞いてあった。

彼らは、聖と魔、陽と陰、男と女など、様々な対極の性を織りなす翼なのだ。世の全ての事象を内に包んだ^{かごめ}六芒星——シオンの星だと、彼につけられた名前の本当の意味。

雪の天使は、人間の葬送を司る天使として、黄泉の鍵——天の光の力を翼に預かっている。それがまさに、魔の少年を浄めようとした瞬間だった。

「——待て待て。悪魔だって、神の創りたもうた使いだろ？」

彼が最初に、騒ぎを大きくする作戦を取った効果だった。通りすがりの謎の青年が、天使の手の光をあっさり止めた。

「夜に歌を与え、地の獣、空の鳥によって知恵を授ける神。叫んでも答えてはくれない。コイツを裁いていいのは、多分あんたじゃなくて、神だけだとオレは思うけどな」

後できくと、それは「聖書」の^{みことば}御言だった。だから天使は虚をつかれ、敵意を収めた。青年はその後吸血鬼の少年を助け、雪の天使はしばらく二人を見張るために地上で過ごす。

青年は、同族に狙われる少年のような異端者を探し、守りに来たと言った。

一安心だ、と。この時彼はそう思ったのに。

「いや。オレ、魔王の息子にやられて、寿命後僅かなんだよ」

またモブが増えただけだ。もうモブ記だ、と彼は諦めた。

—了—

-INFOMATION-

★このお話はフィクションです★

拙作ネタバレワールドとなっておりますが、このお話自体はウソ話です。なので単品で楽しんで下されば本望です。

それでも他作品がもしも気になって下さる方があれば、下記が主な関連作となります。

『聖霊火』:「さざなみ」とシオンの本来

(<https://puboo.jp/book/135315>)

『探偵に天使は味方です』:シオンのオレっ娘ルート

(<https://slib.net/116211>)(<https://slib.net/116360>)

『Atlas'』:マイピク限定・申請お気軽に・シオンの羽を持つ吸血鬼が主役の一人です

(<https://www.pixiv.net/novel/series/9510009>)

『命の河の舟… by birth』:現在は非公開ですが若かりしレキの本編

※いつか再公開するかパプーで出すか検討中

(<https://estar.jp/novels/23488953>)

それではご覧下さり有り難うございました。

2023.10.1 音楽や防衛や色んな日 X@kazari_sou

↑モブの運命から逃げるために↑

著 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
